



グッゲンハイム美術館。ビルバオ市を流れるネ  
ルヴィオン川のほとりに立つ 写真提供：筆者

**3** 月末に数日の空き時間ができたので、スペイン北部バスク地方のビルバオを訪れた。言うまでもなく、フラック・ゲーリーの設計したグッゲンハイム美術館が目的である。

斬新な現代建築によって再生した工業都市と聞いていたから、実はバルビオに、中世から近代にいたる、すぐれた建築が存在する街並みがあることに驚かされた。しかも、都心は個々の建築が好きなきことをやっつけても、角地ではコーナーのデザインを強調するという単純なルールによって、アーバン・ファブリックともいう

べき統一感をつくっている。

ゆえにグッゲンハイムの前後に生まれた、サンティアゴ・カラトラヴァの空港や橋、ノーマン・フォスターの地下鉄、リカルド・レゴレッタのホテル、磯崎新のビル、ラファエル・モネオやシーザ・ペリの計画は、白紙の場所に登場したのでなく、新しい都市の年輪として蓄積されている。日本では、特定の過去を好み、凡庸な現代の開発に目をつぶり、美しい景観をつくるという人たちがいるけれど、是非、ビルバオの歴史的な重層性を見習ってもらいたいものだ。

さて、グッゲンハイム美術館は、ゲーリーの軌跡の集大成として位置づけられる建築だが、やはり現物を見ると、さらにいろいろなことを考えさせられる。

まず、これは建築なのか彫刻なのかという古典的な議論も吹っ飛ばくらい、外観が彫刻であることに徹底しているのが凄い。だが、さすがに建築家だけあって、各部のヴォリュームがどれくらい大ききをもつべきなのかを正確に理解している。興味深いのは、背後の鉄骨のフレームをむきだしにして、部分的にハリボテで

あることを隠さないことだ。ともすると、模型をそのまま拡大コピーしただけの安直なデザインに見えるのだが、その大きさは都市的な文脈において正しいのである。どの角度から見ても、楽しめる怪物のような造形。

複雑なチタンの外皮は、最新のコンピュータ技術と連動した部材加工のシステムによって初めて実現した。一方、内部

## 都市的建築としての美術館

@Bilbao

は、変形したホワイト・キューブ群が中央の吹き抜けを囲む形式なので、さほど過激ではない。

ともあれ、美術館は、川沿いの巨大な橋と絡みあい、天才的なスケール感によって、都市や土木と緊張感のある関係性を生みだし、新しいランドマークになっている。1997年に誕生したビルバオのグッゲンハイム美術館は、20世紀最後の傑作といえるだろう。

をちこち散歩

五十嵐太郎

いがらしたろう

建築史家、東北大学准教授